



No. 122

ティー・ブレイク
Tea Break

打ち上げ花火

夏といえば花火大会である。子供の頃は、家の中で音が聞こえるだけで、わくわくした。そして、子供というのは我慢ができない。そのわくわくする気持ちを抑えきれずに、両親に向かって「早く、早く！」とせきたてる。

大人というのは、花火大会など何度も見ているし、テレビでそのもようを鑑賞するだけで楽しむこともできる。もとより、ごみごみした中で人の頭越しに見るよりは、よく見える場所からの美しい情景を静かに観賞することができるテレビのほうが良い、と思う人も居るくらいである。だいたい、大人は我慢することができる。

けれども、大人になってから、ふとそうした子供心に戻ったことがあるのは、好きな人と一緒に花火を見に行ったことである。大人げも無く「早く、早く！」と相手をせきたてる。一緒に見たくて、せきたてる。

そして、今にして思えば、あの頃に両親をせきたてたのは、自分が早く見たかったから、というだけではなく、両親とともに見たかったからなのだというにも気がつく。それも、一番良いところを一緒に。

ところで、まったくの真球の花火玉を作る技術を持っているのは日本だけである。外国のものは、たいていは円筒形である。もちろん、上がった花火が真ん丸で、しかも同時に色が変わる、などという技術は、外国には無いらしい。よくよく考えてみれば、いかにも几帳面な日本人らしい技術である。

ところが、花火というものは、できあがった状態では、それが成功するものかどうかは全くわからない代物である。上がって開いてみなければ、その出来具合がわから

ないのである。

でもそれは、人間もそうである。上がって開いてみなければ、その真価はわからない。

そしてまた、今は要職についたところで、母親と一緒に見たあの花火のような喜びは、もう得られない。私は、人間の命の終焉というものは、あたかも夕日が沈むように、静かに次第に下りてくるものだと思っていた。決して、あの花火のように、突然色が変わり、消えてしまうものだとは思っていなかった。

大人だって我慢できないことはある。13年前には実母を、今年に入って義母を亡くしてみると、自分にとっての母親は、この世にもはや一人も居なくなってしまった。母親というのは、自分らが心配ばかりかけて、本気で口喧嘩をしている時期などにはしぶとく生きていくせに、これからようやく親孝行でもしてやろうかというようなときに、どうして、あたかもその役割を終えたかのように突然この世を去ってしまうのだろうか。

よくよく思い起こしてみれば、親子で見ることができた花火大会などは、数えるほどしかない。終わりがわかってさえいれば、もう少しあの時間を大切にすることができたのかもしれないが、やはり花火というのは上がってみなければ何もわからないし、だいたいいつ開いていつ色が変わり、いつ消えるのかということがわかっている人生というのもどうかと思う。

今となってはもう聞く術がないが、花火の星のように散らばった数々の思い出が、母親にとってもわくわくするものであったことを願うばかりである。

(正)